「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第 1 回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。
一部の個人名をアルファベット表記しています。

「日本の“けち”と“豪放さ”」

浙江省 王翔

2007 年の末、日本の福田首相（当時）が中国を訪れた際、北京大学で講演した。講演の中で、彼は 1970 年代にあった国際的な石油危機と国内の環境問題が日本に与えた影響に言及した。また、彼は、“環境保護・省エネ分野”が中日協力の“特に重要な分野”になると指摘し、一連の具体案も提示した。展望性があり建設的なその視点は、中国側から賛同を得た。2008 年 5 月、胡錦涛主席が訪日した際も、省エネ分野での協力が中日協力の重要な分野に組み入れられていた。

エネルギー問題が日を追うごとに世界的な課題となっている現在、中国は経済発展における省エネという難題に直面している。そして日本は数十年の努力を経て、ちょうど省エネ分野において先進的な技術と十分な経験を擁している。省エネ分野においては、中日の相互補完性が非常に強く、この分野における両国の協力は前途洋々であり、期待できると言えよう。

日本の商人と取引のある友人によると、日本の商人はとても頭がきれて、入念であり、真面目なのだそうだ。商談の時、彼らは契約の一言一句を見逃すことはない。駆け引きをする時には、細かいことに拘り、しつこく粘る。そうした日本人は、“けち”で守銭奴とすら感じられることもある。しかし、契約が成立すると、日本側は僅かばかりも約束を疎かにすることはなく実行するのだという。もしかすると、頭が良く入念で真面目なのは、日本人が生まれつき身につけている一種の国民性であり、こうした厳格さのおかげで、日本人は限られた土地をきちんと整理して最大限に開発利用できたのではないかと私は思うのだ。省エネ分野においても、真面目で精密で厳格な精神のお陰で、日本人は省エネの極致にまで達することができたのだろう。この面において私の心に印象深く刻まれたのは、日本人が省エネ分野で見せる“けち”と“豪放さ”だった。

去年、父が日本を訪れた。僅か 6、7 日間の滞在ながら、日本人の省エネ分野での“綿密な計算”を目の当たりにしてきたという。父は感慨のあまり「日本人のやりくりのうまさは、日本へ行かないと分からない！」と思わず漏らしていた。

そもそも、父が日本へ行った時は正に炎天下だったが、日本の道行くサラリーマンは誰もが“涼しい”身なりをしていることに目が行ったという。男性はカジュアルなＴシャツとショートパンツにノーネクタイ、若い女性はミニスカートが多かったとのこと。カジュアルで通勤するのは爽やかさのためなのか？まさか、こんな暑い日にオフィスで空調が入らないのか？父は、そんな疑問を持ち、その一行を引率するＦ氏に尋ねた。Ｆ氏によると、その地域のオフィスの多くは、環境省の呼びかけに応じて空調温度を 28 度に設定しているため、誰もが“涼しい”身なりをしているのだとのこと。「夏にオフィスの空調温度を 28 度に設定するだけで、一夏で日本全体だと 155 万ガロンの石油が節約できるんです！」とＦ氏は付け加えたそうだ。

二日目、父の一行は、友人であるＯ氏のお宅を訪問した。父は、Ｏ氏のご自宅の南向きの部屋の外に二本の大きな木が植えられていることに気が付いた。生い茂った木の葉が焼け付く日差しを遮ってくれ、家の中は爽やかに感じられたそうだ。Ｏ氏はその木々を指さし、「あれは、一年を通して我が家の“天然空調”になっているのですよ！」と話したという。そもそも、その二本は落葉樹で、夏には枝葉が生い茂り日差しを遮るが、冬には葉が落ちてしまうので、温かい日差しが部屋に差し込むのだとのこと。

ちょうどその時、奥さんが買い物から帰ってきて、一行が省エネの話をしているのに加わり、主婦の“省エネ術”について話始めた。奥さんの話では、季節外れの青果が中国では人気のようだが、彼女のまわり主婦は季節外れの野菜や果物はあまり買わない、とのこと。そうした作物を生産するにはより多くのエネルギーが必要となるからだという。奥さんは普段から、季節の野菜や果物を買い、しかもできるだけ近い産地の食品を選ぶのだそうだ。そうすることで、輸送過程で消費されるエネルギーの節約になるとのこと。また、奥さんは“省エネ会計”の計算を披露してくれた。例えば、毎日3回、20℃の水1リットルを沸かす場合、中火を使うと強火に比べて年間2.38m3のガスを節約できること。野菜は先に電子レンジで半熟に加熱してから煮た方が、エネルギーの総消費量は減ること。家族全員で食事すれば、ばらばらに食べるより628キロジュールのエネルギーが節約できること…

そう、日本人は省エネについて確かに“けち”であるが、正にこうした少しずつの“けち”が集まってこそ、この分野で日本が注目を集める“豪放さ”となるのだ。統計によると、世界一の経済大国である米国と比べ、同じGDPを創造するにあたって日本で消費されるエネルギーは米国の37%しかなく、先進国の中で最もエネルギー消費量が少ない。太陽エネルギーを利用した発電などの新エネルギー技術においても、日本は研究開発や応用で世界最高水準である。

日本人の代々のしぶとさと入念で非常に細かい仕事のお陰で、今日の日本は省エネ分野において誇るべき業績を手にし、世界の前線に立っているのだ。2010年の上海万博で、日本の“かいこ島”パビリオンでは、環境保護・省エネに関する理念と技術の完璧な結合が、余すところなく表現されている。“かいこ島”パビリオンの外部は銀白色で、太陽発電装置を含む超軽量“膜構造”コーティングを採用して半円形のドーム天井が形作られており、さながら“宇宙トーチカ”の趣がある。それは“呼吸するパビリオン”であり、設計に環境制御技術を取り入れ、光、水、空気といった自然の資源が最大限に利用されているという…

他山の石を以って玉を磨くべし。全世界のエネルギー価格がどんどん上昇して、エネルギーの需給ギャップが日に日に顕在化している今日、日本と中国に関わらず、“節約”は“ソースの開発”と同程度に重要になっている。エネルギー効率の向上、単位エネルギー消耗の低減、省エネ低排出促進、生態環境の保護、これらは何れも、中国が今速やかに対応しなければならない課題である。省エネ分野において、中国は日本の経験を参考にすべきだと思う。何故なら、日本は、中国が参考にできる先進的な省エネの経験だけでなく、中国人が学ぶに値する省エネを命のように尊ぶ気質と精神も備えているからである。